

# 博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査）

吉富朝子



学位申請者 鳥越 慎太郎

論文名 ポルトガル語の接続法とその習得

## <審査結果>

審査委員会は、主査に吉富朝子（第二言語習得研究、英語教育学）、副査として福嶋教隆（スペイン語学）、彌永史郎（ポルトガル語学）、川口裕司（フランス語学）、黒澤直俊（ポルトガル語学）の5名から構成され、それぞれ専門の見地から論文を精査し、内容を詳細に検討した上で2015年11月15日の公開の最終試験を行った。その後、論文および最終試験の内容について協議を行った結果、本論文は、本学大学院が学位授与のために定めた基準を十分に満たしているだけでなく、優れた高い学術性を示していることが確認され、よって審査委員会は全員一致で、鳥越慎太郎氏に博士（学術）の学位を授与することが適当であると判断した。

論文および審査の概要は以下の通りである。

## <論文概要>

本論文はポルトガル語の接続法習得について学習者コーパスを基に論じたもので、接続法習得の全体像を記述するとともに、1) 習熟度別学習者データによる疑似的な習得順序の推定、2) スペイン語では衰退しポルトガル語固有の文法項目と言える接続法未来の習得、3) irrealisの形式として接続法と競合する直説法未来や過去未来との混同、4) 日本人学習者の接続法習得、という4つの研究小設問を立て、考察したものである。ポルトガルのリスボン大学とコインブラ大学で構築され公開されている学習者コーパスに一定のカスタマイズを施し利用したもので、これまで有効に活用されているとは言い難かった、これらのデータを用いた実証研究である。分析の結果、母語別の学習者の産出傾向や時制別の偏り、文脈別の産出傾向に対する母語からの影響などが考察され、研究設問についてもそれなりの結論が得られている。論文では、これらの考察に先立って、先行研究の検討として主にスペイン語学における接続法に関する最新の研究や、対照言語学や一般言語学における叙法とモダリティの研究の成果を援用し、ポルトガル語の接続法についての再考察を行っている。

第1章は、隣接するスペイン語における最新の研究成果などを踏まえながらポルトガル

語の接続法について確認したものである。接続法は主に特定の表現における従属節内で用いられる動詞の叙法であり、現在、未来、(未完了)過去、及びそれぞれの完了アスペクト形式からなる。ただし、接続法未来は接続法現在に対する未来時制としては機能せず、非過去時指示の異なる表現において用いられ、機能を異にする形式である。そのため、論者は両形式が非過去時指示の別形式として定義されるべきであると主張している。接続法の各形式は、構造的には特定の名詞節、副詞節、関係詞節、そして一部の主節表現や定型表現において用いられる。また、意味的には願望や希求の表現、命令そして使役などの表現、目的の表現、疑いの表現、条件の表現、そして譲歩の表現や感情の表現など、多岐にわたって用いられる。これらの多様な表現に共通性を見出し、接続法選択の定義を定めるために、Terrell and Hooper (1974) 以来、特にスペイン語学において、今日に至るまで様々な理論仮説が提案、議論されている。

第2章は接続法を意味的側面から考察し、近年の一般言語学における叙法とモダリティ研究の観点から位置づけを試みたものである。現代ポルトガル語の文法書や教材では、接続法は形態論的視点から直説法との対立を形成する動詞形態素の最上位区分として扱われるのが一般的である。これに対し、近年の叙法やモダリティの研究成果に鑑みると、接続法は直説法未来や過去未来、法的意味を持つ動詞・副詞語彙や発話イントネーションなどととも、非現実性 (*irrealis*) を表現する一形式に過ぎないととらえられる。さらに、日本語の文法研究において提案され、近年、和佐 (2005) によってスペイン語の研究にも導入されている、「発話・伝達のモダリティ」と「命題めあてのモダリティ」からなる二段構えのモダリティ体系を設定する立場から考えると、接続法は命題めあてのモダリティとして命題内での *irrealis* を表すという、極めて限定的な機能しか持たない形態素であることがわかる。そのため、本論筆者は直説法との対等な対立を立てるような考え方は適切ではないと主張する。さらに、モダリティを表現するための複雑な表現体系は、学習者にとって非常に困難であることが想定される。

第3章は、第二言語習得研究のなかでの接続法の習得に関する研究をレビューしたものである。第二言語形態素習得研究において、接続法をはじめとする叙法の習得研究は、時制形式の習得研究と比較すると圧倒的に研究事例が少なく、2000年代になってスペイン語の研究においていくつか見られるようになってきた。加えて、ポルトガル語やフランス語での接続法の習得研究も2010年代になってわずかに事例が確認されるようになった。これらの研究は方法論的に多様であるので、その結果を直接に比較することはできないが、留学などによって目標言語環境での生活を経験することが習得に強い影響を及ぼすことや、願望・希求の表現や時間や条件の表現における接続法がより習得しやすいこと、反面、関係詞節表現や感情表現における習得の難しさなどが複数の研究によって報告されている。しかし、疑いの表現での接続法の習得のしやすさについては必ずしも一致した結論が得ら

れているとは言えない。また、一部の研究では接続法の各形式と直説法未来・過去未来の混同を指摘するものもある。先行研究の多くはスペイン語の接続法の習得に関する研究が中心であるため、現代ポルトガル語では日常的に用いられる形式であるものの、スペイン語ではすでに使用されなくなっている接続法未来の習得についての研究は見られない。

第4章は叙法とモダリティ、さらに接続法の習得研究の一部の成果を受け、接続法との混同が考えられる直説法未来と過去未来について考察されている。ブラジルのポルトガル語の文法伝統においては直説法未来と過去未来は分類的にも機能的にも時制として扱われるのが一般的であるが、ポルトガルやスペインの文法理論の中では叙法として扱われた歴史があり、現代スペイン語に関しては1980年代まで論争があった。個別の言語を離れた意味論の分野では未来時指示と *irrealis* は二面的、連続的なものとして扱われることがあり、本論では両形式を時制とするか叙法とするかの議論は保留しつつも、モダリティを表現する形式として扱う。なお、直説法未来と過去未来の習得研究は接続法習得研究よりも少なく、そのほとんどが *irrealis* 形式としてではなく未来時指示形式として習得を扱っている。

第5章は、これらの先行研究を受けて副次的な研究設問を4点設定する。1つは接続法習得順序を考察すること、2つ目は接続法未来の習得を考察すること、3つ目は接続法各形式と直説法未来・過去未来の混同について考察すること、4つ目は日本人学習者の接続法習得について考察することである。

第6章は本研究の方法論について詳細に説明したものである。本研究ではリスボン大学言語学研究所が構築した *Corpora do Português como Língua Estrangeira (PLE)* とコインブラ大学一般応用言語学研究所が構築した *Corpus de Produção Escrita de Aprendentes do Português Língua Segunda (PEAPL2)* をデータソースとして用いている。両コーパスは共通の手法によって構築されており、被験者は *Common European Framework of Reference (CEFR)* に基づく自己評価によって、習熟度が客観的に評価されている。ただし、両コーパスは被験者の学習者環境が必ずしも同じではないため、直接的な比較は行われぬ。両コーパスを基に筆者は品詞タグ付けや、コンコーダンスーを用いての分析を行っている。分析によって接続法産出がリスト化され、さらに各産出形式に見出し語、時制、文脈、エラーの有無、産出被験者の母語、習熟度、作文テーマが手作業でコーディングされている。

第7章では接続法産出の詳細な分析結果が提示されている。まず各コーパス別に全体の産出を被験者の母語別、被験者の習熟度別、作文テーマ別にまとめ、続いて産出された接続法時制を被験者の母語別、習熟度別に提示している。続いて、*Bento (2013)* を参考にまとめられた30の文脈別の接続法産出を、表現別、被験者の習熟度別、母語別、表現によっては時制別、作文テーマ別に詳細にまとめ、実際の産出例を挙げながら考察がされた。

第8章では各研究設問に対する質的量的な観点からの考察が行なわれた。接続法習得順序については、命令・希求、目的、反実仮想、譲歩、非指示関係代名詞表現において、初級

から上級にかけて緩やかな習得の傾向が示された。また、願望・希求表現と条件表現は中級から急激に習得が始まり、一方で一般関係詞表現では中級をピークに上級での衰退が見られた。その他の大多数の表現では初級から上級にかけて産出の向上や、産出そのものがほとんど確認されなかった。

接続法未来の習得に関しては初級学習者から産出が見られ、中級学習者から急激に産出及び誤用が増えていくことが確認された。また、被験者の母語からの強い影響は確認されなかった。表現別に見ると、教材で接続法未来が導入される際に題材となることが多い条件表現や時間表現における使用が多い一方で、関係詞表現や譲歩の定型表現にもやや産出が見られ、様態表現での産出はごくわずかであった。誤用面では、主節や名詞節での誤用や、反実仮想表現での誤用など、接続法未来表現を構造面や意味面で理解していないと思わしき例が比較的多く見られた。

接続法各形式と直説法未来・過去未来の混同については、主に直説法未来・過去未来が、接続法が要求される文脈へ誤用されている例について考察された。適切な使用が多数を占める中、願望・希求の動詞補語表現や、時間の表現、非指示や一般関係詞表現などで、接続法との混同が確認された。混同は特に中級学習者から多くなる傾向が見られ、ドイツ語、イタリア語、英語母語話者学習者など、全体の被験者数が多い母語話者集団に多く見られた。

最後に、日本語母語話者の学習者の接続法の習得に関しては、譲歩表現での産出が比較的多く見られる一方、両コーパスで全体的に産出が多い願望・希求表現や時間表現、条件表現では産出が少なく、反実仮想表現での産出は見られなかった。また、形式別には接続法未来の表現が比較的多いのも特徴的である。なお、習熟度別には上級学習者に産出が偏る傾向が見られる。ただし、分析対象のコーパスにおける日本語母語話者サブデータが少数であるので、本論での日本人学習者に関する分析は極めて限定的なものであると言える。

第9章では結論にかえて本論のまとめと、本論の研究意義、並びに今後の課題について言及している。本論前半ではポルトガル語の接続法の理解に一般言語学や他の言語における研究成果を導入することで、従来の形態論に偏った視点よりも広い観点から接続法をとらえ、個別の言語研究の枠内や形態統語論的な議論では行き詰まっていた問題の解決が探られた。ポルトガル語の文法では等閑視されがちな叙法とモダリティの研究の観点から接続法が理解されることで、文法記述や教材の内容の向上に寄与していくことが期待される。

また、本論は数少ないポルトガル語の接続法の習得についての研究である。接続法は学習者にとって最も困難な文法事項のひとつであると同時に、その習得に関する研究も研究途上と言える。Bento (2013) のような数少ない先行研究や、後続の研究と比較、統合して、研究成果に厚みを持たせていくことで、学習者の視点からの接続法の理解のしやすさ、しにくさ、混同しやすい他形式や他表現などを理解し、学習者目線からのシラバスや教材の

開発、改善に寄与できることが期待される。

#### <審査概要および評価>

審査委員会は、①ポルトガル語の第二言語習得研究という、先行研究が必ずしも十分ではない分野において果敢にテーマに挑んでいる、この研究の独自性、②スペイン語など隣接する領域や日本語での最新の研究を渉猟し、巧みにそれらを総合し、一定の研究成果を挙げたこと、③既存のコーパスを研究目的に応じカスタマイズし、様々な手法を用いて、接続法の習得過程を実証的に描いたこと、の3点を高く評価した。反面、例文資料の扱いにやや厳密さを欠く場合がある、あるいは論文の前半の言語学的考察と後半の応用言語学的実証研究が必ずしも有機的一体性をなしていない、などの批判もあったが、理論言語学・応用言語学双方の観点から論文をまとめあげた功績は特筆に値するものであり、指摘された問題点も今後の研究展開において解決されるべき点で、研究そのものの価値と完結性に影響するものではないと結論した。公開審査の場では、鳥越慎太郎氏は委員の様々な質問や批判に明確に答え、自身の研究の限界を十分認識しつつ、今後の研究の方向性についても具体的な考えを示すなど、自立した研究者としての学術的能力を十分に有していることがうかがわれた。

以上から審査委員会は、論文が、本学大学院の博士学位授与基準を満たし、かつ優れた学術性を示していることを確認した。よって鳥越慎太郎氏に博士（学術）の学位を授与することが適当であると判断する。